

# ドイツを中心とする都市体験

中間 一範（1組）



## ◆グーテンターク！

小生の海外へのプライベート旅行は、娘二人が共に成人を迎えたのを記念して、家族四人でイギリスからドーバー海峡を渡り（現在はユーロトンネル）フランスとスイスとオーストリアとドイツの五か国を十四日間で跨ぐ、ユーレイルパス利用の鉄道乗継で旅したのが皮切りで、ここではドイツのことに触れながら娘妹在住のフランクフルトを起点にして、鉄道一路でいっ杯こっぺ参るつもりで旅二、旅三の都市の見初めた奥深い異文化について少し調べたその土地の歴史や云われていること、観て感じたこと、生活の様子などを記してみたいと思う。

## ◆ドイツという国

### Ⅱ地理・国家像Ⅱ

国土面積は、日本と同じぐらいの大きさで四季があり、十六の州から構成される連邦共和制国家で、各州はそれぞれが主権を持ち、独自の州憲法、州議会、州政府および州裁判所を有し、首都はベルリンにある。

### Ⅱドイツ人の好みⅡ

まず、世界一の旅行好き（アメリカ、イギリスと続き、日本は第十位）で、一ヶ月連続の休暇を一年に一回取るのが普通とされ、特に夏場になると家族旅行なんかで一箇所に滞在してゆっくり過ごす人が多い。

この連続休暇のイメージは、普段できないことをする為のモノ、リフレッシュする期間で、そのために日ごろから「節約は収入と同じぐらい大切」というドイツの諺もあるくらい慎まじやかな生活をして儉約にいそしみ、大いなる旅行を楽しむ。

自然食品や有機栽培の製品を好み、環境エコオタクで健康オタク。環境に良いと健康に良いと言われる物に目がなく（データを示せばなお完璧）世界一bioを愛して止まないナチュラル嗜好が旺盛で、日々、フレッシュ且つ良質のパンとハム（ソーセージ類）にチーズ、コーヒータイムと伝統ケーキにチョコレートをよく好む。

### Ⅱドイツ人の気質Ⅱ

理屈・論理性を重んじ、質の良いもの耐久性のあるものを好み、ファッションにはあまり気を使わなくて平気。日常生活は質素で堅実、綺麗好き、几帳面で分類整理好き、真面目、照れ屋である反面、権利主張、世間体を気にしない自分重視主義、女性（恋人）相手でも割り勘原理主義を美学？とし、離婚する際の財産の分け方などを決めた結婚契約書を取り交わしてから夫婦になるカップルすらいる。

また、普段から無駄のない合理的・効率的な生活を子供の頃からしつけられ、家の中から家具、衣類に至るまできちんと手入れをして長く大切に使うのは当たり前、キッチンはいつも超キレイに磨かれ「世界一きれいな国民？」心地よい空間を大切に掃除上手で、部屋はいつも整理整頓が行き届いていて、オフィスの書類などの分類・整理も要領よく工夫を施すのが上手と云われる。

### Ⅱお国柄Ⅱ

法律や規則をあくまで順守し、秩序を重んじて曖昧さを嫌う。中でも騒音法に則り、夜十時以降ではパトカーや救急車はサイレンなしで走り、特に日曜・祝祭日の店舗営業、広告類（交通車両等のポディを除く）が一切認められない。

日本社会では、重い病気など事実をオブラードに包んで、他人に気持ち悪く傷つけないように配慮して「うそも方便」での伝え方が美德とされるが、ドイツでは事実を包み隠さず、はっきりと伝えることがきわめて重要で、この背景には「神様の前で嘘をついてはならない」という、キリスト教的な倫理観もあるような気がする。

逆に心配りすることなく、自分の感じた不平不満は堂々と云うことが多くても、感情的なわだかまりが残らない基本的に許される社会である。

多くの人が住むアパートの通路・エレベーター前・階段の電灯は、普段は消灯しており、点灯後も自動的に再消灯し、地下鉄駅のエスカレーターも普段は止まっていて人の気配で動き、ここでも儉約・エコ推進の精神が見られる。

通勤や近郊へ出かける途上の乗り物では、車内のアナウンスが一切ないせいなのか、または他国と陸続きの地に住むに欠かせない注意力が体に染みついているのか、居眠りをしている人はめったにいない、混雑もなく、分厚い伝記モノ、宗教書か哲学書らしき本を読んでいる人はよく見かける。

### Ⅱ食料品類のまとめ買い、買い方の仕組みⅡ

食料品類は週末にスーパーマーケットでまとめ買いする人が多く、買い方の仕組みは、このスーパーでも入口と兼ねない出口側のレジの前にあるベルトコンベア風のところに、自分の買いモノ全部をカゴから出して並べ載せて、仕切りバーを置きながら前の人のレジが済むとコンベアが動いていき、レジ係りの女性からハ口

ーの声で目が合うと同時に挨拶を交わし、係りの手で一つ一つレジを通った買いモノはベルトコンベアの先に流され、勘定を言われてお金を払うパターンであり、持参した袋にどんどん詰め終わるのに数があると、これがなかなか忙しくすばい処理の技が必要で、レシートには消費税七%商品(食品類)と十九%商品(それ以外)が判るように記載されており、黙っているともらえない。

ちなみにビールとは、麦芽、ホップ、水、酵母だけで製造されたアルコール飲料のみを言い、それ以外はビールではなく、ビールに課税する法律(十六世紀発布の純粋令という)はドイツで最初に制定され、世界中で最も多く飲まれているのは「ラガービール」(酵母を発酵させる醸造過程で一時的貯蔵する倉庫をドイツ語で「ラガー」ということからこの名がついた)で、このラガーの味が世界に広まり、ビールの本場となったようである。しかしビールの消費量は、意外なことにチエコが一番で、次いでアイルランド、三番目がドイツで、日本は二十五位にランクされる。

#### ◆フランクフルト

正式には「フランクフルト・アム・マイン」マイン河畔(ライン川の支流)のフランクフルトが都市の名称で、ドイツにはフランクフルトという名前の都市が二つあり、区別するためにこのように言い、ドイツ五番目の都市(ベルリン、ハンブルク、ミュンヘン、ケルンが上位)にランクされる。

#### Ⅱ 国際空港と商業都市そして旧市街の中心「広場レーマベルク」



マインハッタンと旧市街地を望む



広場レーマベルク



ゲータハウス

フランクフルトは、ヨーロッパ最大の国際ハブ空港を有し、日本とドイツを結び空の便の多くは、ドイツの旅を当地から始める人も多く、ルフトハンザドイツ航空は、旅客数でエールフランスに次ぐ欧州第二位として君臨し、商業面では中世から名高い国際見本市、ドイツ証券取引所や金融機関(三百を超える世界中の銀行をまとめる欧州中央銀行にドイツ連邦銀行)を有し、ガラス張りの高層ビル群がマイン

河畔にそびえ立つ「マインハッタン」の別名もあるドイツ経済の中核であり、交通の便利さを背景に、ヨーロッパを代表する金融都市でもある。

新市街マインハッタンのほど近くに旧市街が昔の姿を一寸たりとも変えないで、愛らしい階段状の破風の切妻屋根を持った三つの木骨組家屋(旧市庁舎)と五角形の石畳そのままの「広場レーマベルク」は、旅行者が必ず足を運ぶ場所、この広場近くにはゲータハウス(生家)とゲータ像があり、文豪ゲータの生前の当時が偲ばれる色々な用途のセンスある部屋が一々四階まで展示してあり、絵画、蔵書、お金持が付けた家計簿も含めて、十八世紀の裕福な上流階級の生活ぶりがよくわかる。

#### Ⅱ 切符の購入、列車への乗降車

駅の窓口でいちばん安い「ジャーマンレールパス」を指定して、パスポートと何日間有効なパスを買うかを言って購入する。

どこへ行くにも駅への入場は無改札(車内で検札)で、リフト利用かスロープにて(階段を利用することなくバリアフリーが当たり前)まずフランクフルト中央駅の構内で、朝食用の飲み物とサンドイッチ(パンにウィンナー、ハム、生ハム、サーモン、ニシン、チーズ、野菜類がこぼれそうに挟んだものなど)があり、特にニシンが美味しい)を買う(約十ユーロ)プラットホームへ停車の車両に乗り込み、(専ら二等車利用でどこかしらに着席できるのが不忠議)発車時間になったらアナウンス、発車ベル一切なしで動き出し、列車内で食事となる。

乗車中は、乗換などの案内以外には、発車と同様に途中停車で発車時のアナウンス、駅構内での発車ベル、アナウンスは一切なしで進行し、乗降車時はドア内外にあるボタンを自分で押してドアを開け(ドア閉は運転士操作が一般的で、自分でボタンを押してもよい)終点で全員の降車が終わると車両内の照明は消灯され、そのまま発車までに時間調整の車両は間引き点灯される。また、プラットホーム、連絡通路、駅構内等の照明は全般的に暗く、日本と比較すると違和感があるが、無駄を省き、エコ寄与、エネルギー削減に努める国の精神が徹底している。

「旅」 フランクフルトからマルブルク、ハンブルク、コペンハーゲン、ベルリン、ポツダム、ライプチヒ、ドレスデン、プラハを鉄道で巡る。

#### ◆大学の町マルブルク

中世の街並み色濃く漂う石畳の坂道が続き、手軽にゆったり歩きたい、とても落ち着いた情緒豊かな、くつろぎの城下町と云われるこの街に立ち寄ってみた。

駅を降りてバスに乗り下車すると、歴史ある折り重なった家々造りを見上げる町

並みが眼下に広がり、エレベーターアクセスで上がって旧市街地へと向かう。車の往来も少なく、木組みの家がよく保存されており、ルターが宗教問答を行ないマルブルク会談の舞台となったこの街の丘上に位置するマルブルク城、ドイツ国内で最も古い純粋なゴシック建築で、ケルン大聖堂の建築モデルとして取り入れられたとされる聖エリザベート教会がある。

また、一五二七年にドイツ最初のプロテスタントの大学として設立されたとされるマルブルク大学は、名声を保ち続け、現在も街の人口、七万五千人のうち一万五千人を学生が占めるという大都市となつて今日にあり、ドイツに古くから語りつがれてきた実の昔話を拾い集めて編集したグリム童話集を完成させたグリム兄弟は、一八〇六年から約三十年間この町に住み、この間この大学で学んだと云われる。帰りは歩いて駅へと向かった。



マルブルク城



聖エリザベート教会



広大なアルスター湖と街並

### ◆港町ハンブルク（フランクフルトから北方へ約二時間半）

北部ドイツのハンブルクは、ベルリンに次ぐドイツ第二の都市。ドイツにあってヨーロッパ最大規模の港を有し、中世にはハンザ同盟（王侯貴族の支配を受けない自由都市の連合体）の中心都市として栄えた歴史ある街として知られ、ブライムスが生まれ、ビートルズがデビューした音楽の街でもあるとか。

また、十三世紀初頭に水車に水を引くためにエルベ川の支流のアルスター川をせき止めて造られたというアルスター湖は、水の都ハンブルクの象徴ともいえる存在の大会の中心地にあるとは思えないくらい巨大な二つの人口湖で、市民の憩いのオアシスとして、また遊覧船もあり、いつも賑わっていて、その美しさは「ハンブルクの真珠」と呼ばれるそつで、途中下車して遊覧船乗りなどで時を過ごした。

また「ハンバーク」の語源は、アメリカに移住したドイツ移民が、ハンバークステーキをアメリカに持ち込み、ハンバークステーキをパンに挟んだものをハンバークーと名付けるようになり、ドイツのハンブルグを英語読みでのハンバークに由来

する（ちなみにハンブルグで「ハンバーク」というと、生の牛肉に生のタマネギやピクルスを混ぜた冷たい料理をさすようである）  
自然に恵まれ、魅力いっぱい溢れた街ハンブルクは、ドイツ人が住みたい街ナンバーワンだと言う。

### ◆デンマーク国のコペンハーゲンへ

#### II バルト海峡を渡る II

デンマーク国コペンハーゲンへは、ドイツ国から列車に乗車したままバルト海峡を渡る体験で、この列車ICは、先頭または後端が四角状の黒い異様な姿の車両で、途中、国境越えの検札を受ける。（現在はICE最高速列車も運行されている）

このバルト海峡を渡るフェリー（約一時間）は、船倉に線路が敷設してあり、列車ごと積み込まれる仕組み（三〜四両）で、陸から船への船から陸への自力移動時の車両のがたつきがなく、レベル差を感じないのが不思議である。

フェリー利用の乗客は、貴重品のみを身に着けて列車から降り（列車内に残る人は数少なく、残っていると怪しまれる雰囲気）船内で食事する人、デッキからバルト海を眺めたりして過ごし、公海上でもあるので免税店で買い物をする人も多い。デンマーク国に上陸すると、国境を超えるため車内検札（三人編成の大柄な体格揃いで、拳銃を腰バンドにぶら下げている）を受けて、列車は一路コペンハーゲンに向けて走り続ける。車窓からの眺めは風力発電塔が林立し、幾多かの鉄橋で島から島へと渡る。このルートには渡り鳥の飛来コースを遡ることから「渡り鳥コース」という愛称がつけられている。



フェリーへの入出線路



フェリー船倉の様子



四角状姿の列車



自転車優先の専用列車

なお、世界で列車ごと積み込まれるフェリーは、他に中国の本土と海南島間の瓊州海峡を渡るフェリーと、イタリア本土とシチリア島間のメッシーナ海峡を渡る二か所があり、どちらも原則として列車に乗ったままで船外に出られない。出たとしてもデッキのみで、この中国とイタリアの二航路は距離が短いこともあって、海峡大橋をかける計画があり、いずれは廃止されるようである。

## ◆デンマークという国

### Ⅱ地理、気候Ⅱ

国土面積は日本の九州とほぼ同じで四季があり、緯度は樺太の最北端よりやや北にあり、5百以上の島々からなる北海とバルト海を分かち半島、ユトランド半島最南端にある、山がない地震がない一番小さな国で、夏は最高二十度前後で湿度が低く、なかなか太陽が沈まない二十二時頃まで白夜のシーズンとなり、冬の気温は最低0℃前後で、ドイツと国境を接しているがユーロ非加盟国である。

### Ⅱお国柄Ⅱ

世界的な童話作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンが生まれた国で、美しい森と酪農だけでなく、知育玩具レゴブロックや陶磁器ロイヤル・コペンハーゲン、そして「北欧デザイン」を代表する工芸や建築の優れたデザイナーたちが数多く生まれたデザインの聖地と云われ、特にアルネ・ヤコブセンは有名である。

福祉先進国で知られる北欧の国々は、人材こそが国の宝（資産）という考え方があることで、重要な働き手として女性に注目し、社会進出の際に家事や育児に問題が生じないように国策として、まず福祉面を充実させることを優先させている。

また、国会議員と医者には収入が低いが尊敬される人達だとか。金儲けの代名詞と化した、どこかの国の先生方とは大変な違いがある国である。

デンマークの消費税は、なんと二五%。所得税も所得の半分というから驚き。でも教育費や医療費は原則無料。支払った税金は、振り替わってきちんと国民に返ってくる仕組みである。

またこの国には国産車がないので輸入車の関税が高いたけでなく、車は贅沢品で消費税が百八十%も掛かるというからこれも驚き。だから、安くてエコな自転車に乗りやすいシステムを国がつくっていて、自転車に乗った距離で税金は控除されることで、乗れば乗るほど税金が減っていくという発想が面白い。で、車道と歩道の間に自転車道路が設けられ、自転車に跳ねられても歩行者側の自己責任。サラリーマンの約三割は自転車通勤で、電車にも自転車専用車両があって、自転車を乗せて移動ができるなど、まさに自転車王国である。

## ◆港湾都市「コペンハーゲン」へ（ハンブルクから約四時間半）

北欧の玄関口ともいわれるコペンハーゲンは「商人（コペン）の港（ハーゲン）」を興じたのがはじまりで、現在も港湾都市として重要な拠点になっており、見どころは中央駅から半径約二キロの範囲に観光スポットが集まっています、駅前にホテルをキープし、徒歩で見て回った。

## Ⅱクリスチャンスボー宮殿、人魚姫の像、チボリ公園、ストロイエ通りⅡ

クリスチャンスボー宮殿、一八七七年創建後、度々の破壊に遭い、一九二八年に再建されたこの宮殿は、かつては王宮として使用されてきた重厚な石造りのバロック様式の建物で、現在は国会議事堂、女王の謁見の間、教会として利用されていて、国会議事堂の正面玄関の上部にある彫刻は、歯が痛い、耳が痛い、頭が痛い、胃が痛いと嘆く四体の「四痛」を表し、収入が低くても元気で働くようにとの国会議員への警告だとか、この歴史・ユーモアの魅力に感心した。



クリスチャンスボー宮殿の四痛像



人魚姫像前にて



チボリ公園正門

人魚姫の像は、海岸沿いに飛び出した岩の上で一人佇む全長八十センチの像で、想像に反して小さく、ほんとに寂しげで、その肩先の細い線には哀愁がただよう悲しい物語を思い起こさせる愛らしい姿をしていて、アンデルセンの童話「人魚姫」から一九一三年に造られた。

チボリ公園（一八四三年開業）は、世界最古のテーマパークとして知られ、各種遊戯施設や売店、レストランも多くある遊園地で、夏時間には夜、イルミネーションが点いてからが最も賑やかになる、家族で遅くまで楽しめる憩いの場でもあり、他国でディズニーランドができる前は、世界最大規模の遊園地であったと云われる。ストロイエ通りは、世界初のモデルになった歩行者天国（一九六一年発足）で、時間を忘れてしまうほどバラエティに富んだショップが立ち並び、手描きによるコバルトブルーの絵柄が特徴の陶磁器、ロイヤル・コペンハーゲン本店（一七七五年創業）は、この通りにあり、ストロイエとはデンマーク語で歩くことを意味する。

## ◆コペンハーゲンからベルリンへ（約六時間、ハンブルクまでは往復の旅）

ドイツは、かつてボンが首都で、首相アデナウアーの名を思い起させるが、調べてみると首都をめぐる歴史的経緯があり、もともと中世のドイツは小国が乱立し、一八七一年、プロイセン国王ヴィルヘルム一世の戴冠でドイツ帝国として統一され、ベルリンを首都とした。

一九四五年、第二次世界大戦に敗北したドイツは、一九四五年、ボンを暫定的な

首都とするドイツ連邦共和国（西ドイツ）とベルリンの東部地区（東ベルリン）を首都とするドイツ民主共和国（東ドイツ）に分裂していたが、一九八九年、ソビエト連邦のペレストロイカに端を発した東ドイツの民主化運動をきっかけにベルリンの壁が崩壊し、翌一九九〇年、再統一を達成し再びベルリンを首都と定めて以降、旧東ベルリンを中心とするベルリンの再開発・インフラ整備と、ボンからベルリンへの連邦政府機能移転による実質的な首都機能移転が順次進められ、二〇〇一年五月二日にベルリンへの首都機能移転が完了したと云う波乱に満ちた遷都の歴史が刻まれている。西駅内にホテルをキープし、市中バスでブランデンブルク方面へ向いた。

## II ブランデンブルク門 II

ドイツマラソンのスタートとゴールとなる地点でも有名なこの門には、勝利の女神ヴィクトリアの像が四頭立ての馬車に乗っていて、その向きはどちらを向いているかが気にかかっている行っている見ると、門の正面部が広場の東に面して中心部を望む東を向いていることが分かった。

門の建造は一七九一年で、要塞を廃止した代わりに市街地全体を大きく取り囲むように、ベルリンの税関壁としてアテネにあるアクロポリスの門であるプロピュライアを模し、高さ二十六m、幅約六十六m、門の両面には奥行き十一mの横桁をささえる六本のドリルス様式円柱が立ちならび、五本の通り抜け通路に分かれていて、ベルリン州政府の決議により二〇〇二年十月以降、バスやタクシーなども含めて車両通行が禁止となり、現存する唯一の都市門である。

## II ベルリンの壁と崩壊劇 II

ベルリンの壁は、一九八九年に崩壊し東西が統一されたが、なぜ西ドイツと東ドイツの二つの国を引き裂く壁が造られたのか。真相は社会主義国東ドイツの経済状況は、一九四九年建国以来ずっと悪化の進みが続いて行って、経済成長を続けている資本主義国西ドイツへと国を去る国民が、二百万人にのぼっても後が絶えず、東ドイツ政府高官は、この流出事態が続くようでは社会主義国家という自国の存在は作れないと考え、一九六一年に西ドイツをぐるりと取り囲むように東ドイツと分離する、長さ約百五十五km、高さ約三mの壁を作って、強制的に留まるようにしたことが所以である。

では、この壁の崩壊劇であるが、当時社会主義国家であったハンガリーは、国民の不満から自由化の動きが強まり、国境の鉄条網を撤去して、必要であったビザの発行に国境警備兵も進歩的に扱って、西側自由主義国家であったオーストリアへ入ることができるようになり、当時社会主義国への旅行が可能であった東ドイツの国

民は、これに目を付けるのは当然で、ハンガリー経由でオーストリアに入り、そこから西ドイツへ逃亡する手段が蔓延し、これに端を発して自由化を求めることを公然として反政府デモをするようになり、デモへの参加者が次第に増えて、政府も阻止できなくなるほどの勢いになっていき、正当な理由があつて西側に行くものにはビザを発行する方針を打ち出したのが、只今をもって自分の好きな所へ自由に旅行しても良くなったとの政府の許可発表とのすり替わったニュースが流れて、壁に詰めかける市民が殺到して壁を開けるの大騒ぎに発展し、ついに政府が東西ドイツ国境開放を発表し、二十八年の歳月を経て分断していたベルリンの壁が崩され、東西ドイツの平和的統合をきっかけに東欧でも民主化が進み、社会主義政権やソ連も崩壊し、長きに渡る西側と東側との冷戦の終結を迎えるという歴史的な革命が世界平和をもたらした。



ブランデンブルク門にて



連邦議会議事堂のドーム



ベルガモン博物館の陶器壁画

## II 連邦議会議事堂、ベルガモン博物館 II

連邦議会議事堂は、太陽の動きにあわせて常に角度を変え、直射日光を議場に入せず、かつ議場を常に明るく照らすよう頂上をガラスドームでプログラムミングされていて、観光シーズンには二十二時まで開館されるベルリン観光の目玉である。ベルガモン博物館は、古代遺跡を移築したベルガモンゼウス大祭壇の微細なモザイク画を始めとする浮彫の彫刻や彫像・石像、青色彩色の陶器壁画など、ギリシャ、ローマ、トルコ南部を含む中近東のヘレニズム美術品、バビロニア美術品、イスラム美術品が展示されていて、紀元前の昔にタイムスリップすることができる。

## ◆ 国王離宮の町「ポツダム」、音楽の町「ライプツィヒ」

ベルリン周辺の最も魅力的な観光地と云われるポツダム、ドイツ降伏後の一九四五年のポツダム会談（第二次世界大戦中最後のアメリカ、イギリス、ソ連三国による歴史的巨頭会談）が行われたツェツィーリエンホーフ宮殿、当時の国王の夏の離

宮で隠れ家でもあった華麗な庭園を有するサンスーシー宮殿を観て回った。  
 なお、この際せっかくであるので、音楽の父バッハが活躍し、この地でゲーテのファウストを翻訳したことで知られる森鴎外が留学したライプチヒに足を延ばし、一九八九年にドイツ再統一への道を開いた平和的革命の出発点となり、有名になったニコライ教会などを観てベルリンへ戻った。



ツエツイーリエンホーフ宮殿



サンスーシー宮殿中央の石像



宮殿と前面に広がる庭園にて

### ◆宮廷都市「ドレスデン」へ（ベルリンから約三時間半）

ドレスデンは、十五世紀からザクセンの選帝侯や王家が居住し、十八世紀にはヨーロッパの政治・経済・文化の中心となり栄えた宮廷都市で、第二次大戦末期にイギリス・アメリカ軍による爆撃により壊滅的な被害を受け、その後復興を遂げたヨーロッパ有数の凄みある装飾強調バロック建築様式の魅惑的な美しい町である。

特に大戦中に奇跡的に残った陶磁器モザイク模様の壁画がある、ドレスデン・レジデンス城。この城には「ドイツ歴代の君主の行列」と呼ばれる壁画がシユタルホーフ（武芸競技場）の外壁に高さ八m、長さ百二m、二万五千枚もの陶磁器タイルでザクセン選帝侯や、国王三十五人と市民階級の代表者たちが生き生きと描かれており、中央部分の馬の上でこちらを向いている（写真では見えにくい）のがドレスデンに繁栄をもたらした偉大なアウグスト王で、マイセンの陶磁器を誘致したとされるその精巧な出来栄え、存在感に見惚れてしまった。さらに噴水で中庭を取り囲む多数の石像彫刻で飾られたツヴィンガー宮殿を観た。

### ＝お菓子「シュトレン」のじい＝

ドイツではクリスマスと言えばケーキではなく「シュトレン」というお菓子が一般的で、クリスマスが近づくとパン屋さんやお菓子屋さんの店頭に並び、クリスマスを待つ四週間の期間である、アドヴェントと呼ばれる待降節の各週末にイエス・キリストの生誕の日が近づいてくるというお祝いをする際になくはならないお菓子で、生地にはラム酒などに浸けておいたドライフルーツ（主として干しブドウ）

とナッツが含まれており、たっぷりのバターと一緒に練りこんで焼いたもので、表面を砂糖糖でコーティングしてある日持ちの良いパン（ケーキ）で、身内や身近な友人とささやかにティーパーティをし、このシュトレンを薄く切って賞味する。  
 ここに敢えて記すのは、このお菓子の発祥の地は、ザクセン州（旧東ドイツ領）のここドレスデンだと云われており、起源は十四世紀あたりまでさかのぼり、当時豊かな人たちの間でクリスマスマスギフトに使われていたお菓子だったという説があり、当初から高級品だったようで、現在では「ドレスデン風シュトレン」は商標登録され、ビール純粋令と同様に材料の分量が指定されているとか。基本的なレシピは存在するが、ドレスデンにある約五十軒のパン屋は、門外不出のレシピを代々伝授して味を競い、十二月の第一土曜日に巨大なシュトレンがパレードする祭りが行われるそうである。



レジデンス城の君主の行列壁画



ツヴィンガー宮殿の彫像



お菓子シュトレン

### ◆チェコ国のプラハへ（ドレスデンから約二時間半）

ドレスデン中央駅から再び長距離飛行特急の国際列車に乗り、チェコのプラハへ向かう。エルベ川沿いに走る車窓からの美しい眺めは飽きることがなく、途中国境越えの車内検札を受けたが、拳銃を腰にぶら下げたいかめしい大男二人が、車内を見渡しても日本人らしきは私たちだけで、単身者でないためかこっぴり対応で冗談らしき言葉を交えて、何の提示も求めずの通過儀礼であった。

### ◆チェコという国

#### ＝地理、気候＝

チェコは、ちょうどヨーロッパのど真ん中に位置し、一年を通して四季があり、国の大きさはデンマークと同じくらいの大ささで、隣国スロヴァキアと一九一八年までまったく違う国だったのが、その後の世界情勢に対応するため、ハンガリーの一部であったスロヴァキアがチェコとの連合により二つの民族からなるチェコスロ

バキア連邦共和国となった経緯があり、両国間で一九八九年、平和的分立が図られチエコ共和国として独立し今日に至る。

## II 気質、お国柄 II

国民は、みんな勤勉で向学心が強く、時間に正確で、まるで日本人に似通っており、ヨーロッパでもかなり早い時期に近代工業化を成し遂げ、旧共産圏の中でもピカイチの経済成長率を誇っていると云われ、二〇〇四年にEUへ加盟している。

この国の名産は、なんといってももガラス産業で、伝統的ガラス工芸のポタン、ボヘミアンガラスと呼ばれる透明度の高いクリスタルガラスの繊細な美しいカットは、すでに十三世紀から欧州諸国の垂涎的で、オーストリア・ハプスブルク家に支配されていた時代（一七世紀～二十世紀）にチエコ語を継承していくために操り人形での劇をチエコ語で見せた人形劇（マリオネット）を継承する、国立マリオネット劇場やアニメの技術も素晴らしい国である。

加えて「一八二四年から世に出ているピルスナータイプのビール」日本で普通に飲まれているビールとはどこが違う旨さで泡の消えない注がれ方、程よいジョッキも素敵でお変わりがいっぱい止まったのかわからないくらい美味しく、チエコ国がワインなどには目もくれずビール一筋の消費量ナンバーワンにランクされる訳が判った。なお消費税について食品など生活必需品には十五%、それ以外は二十一%である。

ちなみに「ロボット」と云う言葉は、チエコの作家「カレル・チャペック」の小説から出たとある。ホテルは駅近くにキープし、地下鉄利用で町へ移動した。

## ◆百塔の町「プラハ」

九世紀末、ボヘミア王国の首都として栄えたプラハは、多様な建築様式の歴史的建造物がそびえ立ち、中世から時間が止まったような美しい景観、教会などの尖塔が林立する様子は、百塔の町とも謳われるほど数多い時代の建築様式が混在する歴史上の宝庫で、プラハ歴史地区として一九九二年に世界ユネスコ遺産にも登録されており、千年の歴史を誇る「ヨーロッパの魔法の都」「黄金のプラハ」「建築の博物館」などと、プラハを賞賛する言葉があるほど神秘的でもある街並みの空気で満ち溢れていて、今ヨーロッパではヴェネチアに次ぐ賑わいを見せる観光都市でもある。

## II 旧市街地広場の天文時計 II

時間になると、からくりが動き出し、窓に姿を現す仕掛け人形で有名な旧市庁舎の天文時計。最も古い部分は時計の機構と天文図の文字盤であり、製作は一四一〇年にさかのぼり、その後、一四九〇年頃に暦表盤の追加と時計本体へのゴシック彫刻による装飾が施された。この時計は時間を知らせるほか、月と星の位置を示し、

毎正時になると窓が開き、十二使徒行列の彫像が現れるので、この魅了し続けている珍しい光景、パフォーマンスを見ようとするとする人で広場は一杯になり、その中に加わり共に鑑賞した。

## II カレル橋 II

街の中心を優雅に流れるヴルタヴァ川に架かるプラハ最古のゴシック様式の美しい全長五百十六メートル、幅九.五メートルの石橋で、全出入口を二つの塔に守られて、両側の欄干にはさまざまなポーズで三十体のキリスト教聖人像が並ぶ構図、この中にはフランシスコ・ザビエルの彫像もあり、かつてはプラハ橋と呼ばれていたカレル橋は、曇り空の下で嘆く橋、夕暮れの中で祈る橋、灯りに照らされて沈黙する橋、そして青空に明るく謳う橋とも形容され、日暮れ近くに歩きながら観たこれらの石像に、カミさんもその一体一体の風情に魅入り、小生もすっかり吞まれて一通りどころか二度も住った。



百塔の町プラハの街並



広場の天文時計  
(上二つの小窓が開く)



カレル橋の石像群  
(後方はプラハ城)

## II プラハ城、聖ヴィート大聖堂 II

名実ともにプラハのシンボルであり、歴代のボヘミア王九世紀末に始まり、神聖ローマ帝国皇帝に選出された十四世紀カール四世の時代に現在の姿となり、現代の大統領府でもあるヴルタヴァ川を一望する丘の上のプラハ城。プラハ城の内側にある、高さが九六.六メートル二本の尖塔が目立つチエコで最も大きい重要なゴシック様式教会の壮麗な聖ヴィート大聖堂。神聖ローマ帝国の首都となったプラハにおいて、六百年という長い時間を経て一九二九年に完成した。

## II 大聖堂「カテドラル」の由来 II

「大聖堂は、司教（主教）の首座の教会」で、その司教の座する壮大な椅子「司

「教座」のことをカテドラル、そのカテドラルを有する教会という意味でカテドラルとい  
い、それらが立派で大きい教会なので「大聖堂」を意味するようになった。

建築的には、ゴシック建築の幕開けをしめすもので、あのキリキリと天を刺すよ  
うに上がった塔を持ち、上へ上へと垂直感の強調されたカテドラルを造る技術を完  
成させた様式のこと、あのカテドラル大聖堂に入ると、正面に高々とかがげられ  
ているバラ窓（ステンドグラスの丸窓）から差し込む優しい色に満たされた特別な  
空間と拡がりの光が祈る人々に「神は光なり」と言わしめたそうである。

蛇足ながら寺院の呼称は、修道院のように礼拝施設と修道士たちが神学を学びな  
がら宿泊する施設があるものを寺院と呼ぶ場合があるが、はっきりと区別されてい  
る訳ではなく、寺院も聖堂も全て教会である。

「旅二」 フランクフルトからケルンへコブレンツへトリアへストラスブルクを鉄  
道で巡る。（ライン川・モーゼル川沿いを車窓から眺めながら途中下車する旅）

### ◆ケルン・ボンからコブレンツを経由してトリアへ IIライン川とローレライの岩II

この川に沿って走る鉄道は、川の両側に敷設されており、橋は皆無で特に中流地  
域での船旅は美しい文化の宝庫を川から味わえるところとして最高と謳われるが、  
車中からの眺めは川沿いの山頂に点在する名物の幻想的な古城、観光船、生活に寄  
与する運搬船、対岸に走る列車など飽きることなく、特に伝説のローレライの近く  
に差し掛かると川が大きく蛇行する手前で切り立った岩肌が視界に飛び込んでくる。



ローレライの岩



コンパートメントの座席



ケルン大聖堂

この岩には多くの言い伝えがあり、核心は愛しい歌を口ずさみながら金色の長い  
髪をとがして船乗りを誘惑し、舵取りを誤らせたと言われるハイネの詩にも詠まれ  
たローレライの乙女の話である。北海へ流れそぐ川の左側を走る列車に乗車する  
必要があり、実際目のあたりにしたが、カミさんからただの岩山で伝説とは裏腹ね

の言葉、重厚さと景観は薄かった。

なお、ドイツの大きな川であるライン川は父なる川、ドナウ川は母なる川との呼  
称もあるとか。この形容から頼りになる運しき、情ある優しさの面影を連想させる。

ここに列車（二等）のことを記すと、各座席には簡易テーブルが備え付いており、  
家族やグループには便利な個室用として区分されたコンパートメントの座席が用意  
のある車両もあり、座席を指定すると席の網棚前面バーに名前と乗車区間が記され  
たシールが貼ってあり、一目瞭然と判かる。

### IIケルンとボンII（フランクフルトから北西方へ約二時間）

ローマ帝国の植民地として栄えたケルン。駅舎に差し掛かるとフランスの影響を  
受けた壮大なゴシック様式のケルン大聖堂（十二世紀に着手し約六百年の年月  
を費やして完成）が飛び込んでくる。下車して早速この圧倒される大聖堂へ向かい  
ビル風？が吹き荒れる中を辿り着くと、聖堂には展望台があり、エレベーターがな  
く、約五百段もの階段を上ることになり、高さ百五十七メートルの塔上から街中を  
見下ろす光景は壮観そのものであった。

また、言葉自体はフランス語であるが、オーデコロン発祥の地として知られてい  
て、ドイツで最も規模の大きなカーニバルがケルンで開催されるそうである。

夜はベートーベンの故郷ボンへ向いて、有名なクリスマスマーケットを覗いて回  
り、夕食代わりのワインナーとサンドイッチにグリユウワインを飲み、気に入った  
カップだったので返さずに（返すとカップ代金は戻入される）ホテルに帰った。

### IIコブレンツからトリアへII（約二時間、コブレンツまではケルンから約一時間）

コブレンツは、モーゼル川とライン川の合流点に位置し、河川交通の要衝で、ドイ  
ツ最古にして最も美しい都市に数えられ、素晴らしい環境の中で壮麗な宮殿や教会、  
かつての貴族邸宅、見事な市民家屋がコブレンツ二千年の歴史を今に伝えている町  
で、トリア行き列車待ちの合間を縫って街中を散策した。

列車はモーゼル川に沿ってトンネルを潜り抜けることに川の左右が入れ替わり、  
ローカル色漂う観光船、丘上に点在の古城や村家、駅舎、ドイツ最古のワイン生産  
地で、急勾配斜面のブドウ栽培地など車窓からの眺めを楽しみながら、トリアに到  
着した。

### IIトリアという町II（フランクフルトの西方）

ルクセンブルクの国境に近い、紀元前に建設されたドイツで最も古い都市で、か  
つてローマ帝国がヨーロッパ進出の拠点とし「第二のローマ」と云われ、ローマよ  
り古い町とある。

今なお、古代と中世が同居し、旧市街の入り口にそびえるローマ時代のボルタ・ニグラ（黒い門）は、大きな石で築いた、これ以上頑丈にできないと思われるほど堂々とした黒みある門、ここから歩行者天国に沿ってドイツ特有の切妻屋根や赤い家並、装飾が美しい建築物が立ち並び、どの家も高さや大きさは統一され、外観の装飾にも個性があつて彩りも豊かなのが見ていて楽しく、旧市街の中心地には丸みと半円強調ロマネスク様式の大聖堂、ゴシック様式の聖母教会を観て回った。



ボルタ・ニグラ（黒い門）



黒い門内から雪を被る家並



車窓からの眺め

またトリアは、ドイツワイン発祥の地であり、世界的ブランドとして有名なモーゼルワイン（白）の一大生産地で、昼食時に少々多めに飲んだが悪酔いすることなくとても美味しかった。

#### ◆トリアからフランス国ストラスブルクへ（トリアから約二時間半）

ストラスブルク（仏名ストラスブル）とは「街道の町」という意味で、フランス北東部アルザス地域圏にあり、ライン川のほとりに位置する都市で、中世から交通の要所として繁栄してきたドイツとフランスが領有権を度々争った町である。ホテルは駅前にキープした。

街の中心にはノートルダム大聖堂があり、高さ百四十二mの尖塔をもつ非対称の形は街のシンボリック的存在。建設に一七六六年から一四三九年まで三百年も要しており、地元産のバラ色の砂岩でできた繊細な建築は、ゴシック様式の傑作といわれている。ケルン大聖堂とはまた違ったその雄姿、スケールに圧倒される大聖堂で、毎日十二時三十分動き出すカラクリ天文時計も人気である。さらに、ライン川の支流イル川に囲まれ、アルザスの伝統家屋である美しい木組みの家々が並びブティックは、自然豊かな川沿いを散歩したり、水上バスに乗車したり、風情ある中世の街並みを楽しめる観光地として人気があり、その佇まい景観に飽きることがない。

一方、ここストラスブルは、LRT（次世代超低床型路面電車）の短い七両編成が有名で、LRT導入後は環境負荷の低減やバリアフリー化で、道路交通の円滑化

につながる公共交通利用者が増えたとされ、日本の各地からも視察に訪れて、鹿島の市電も十二台参事導入が図られている。



ノートルダム大聖堂の彫像



川に囲まれる伝統家屋



超低床型のトラム

#### ◆チユース！

これで打ち切りとするところ、おおー天国は楽園じゃって。住んでみゃはんか？うんだもしたん。そのお声はおやっときー。私いどんなまだ行つてもはんと。

ああ喉が渴いたがよ。誰いか「俺りい冷たいビールを下いやはんか」。そいがな真こて済んもはん。今ここに用意が無かつしたがよ。そん変わりに私いどんの愛しい口びるならいっばい上げるよ。ホホホそいも好かね。いけんじゃしたろかい。懐かしかったがよ。おっと、よだっかどんもう発ちっつてな。皆さんもつけて出っさやんせ。ところでそこのお前んさあ達ちや誰いじゃろかい。判かいはもはんか。うんにや判らん誰いや。そげんこと言っちよい奴ちや何ん組のドイツじゃー了

### 八期通信アーカイブス



2003年 第9号  
東 佐津子（4組）

ディズニーシーを一言でいえば「スリルとファンタジーの世界」だが、これだけでは頭から湯気が立ちのぼる浜崎さんの姿が見えるような気がするので、印象に残った2つ3つを思い出してみよう。

インディジョーンズの世界を体験する乗物はおもしろかった。安全装置でしっかり身体を固定し、猛スピードで怪しげな怪獣がうごめく中を突っ走る。突然直角にカーブ「**チャーツ**」と声が出ないのは失神した人とは限らないが、あっ！と言う間に終わって外に出ると、どこでいつの間に撮ったのか、いろいろな表情の写真が壁に貼ってある。

よかったら記念に一枚買おうと思って自分たちの写真を見ると**ギョッ!**。ものすごい形相の面々が、にぎりん棒にしがみついているではないか？これはどう見てもカメラが壊れたせいとか思えない。

幸い私は、横を向いていて前の男性に顔の大部分が隠されて難を逃れたホッとした。

・・・誰ひとり写真は買わなかった。よほどショックが大きかったのか、その後もその写真の話は誰の口からも出なかった。